

ミステリ読書案内

2024. 8. 22 発行元

第599号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

天藤真「ベスト表」(再掲)

私が大学生だった1970年代。「本格ミステリ」の書き手として注目していた作家の一人が天藤真。作品数は多くないのだが、楽しく読ませてもらった。そんな天藤真の『ベスト表』を再度取り上げてみる。

《天藤真作品のベスト表》

1. 大誘拐
2. 鈍い球音
3. 殺しへの招待
4. 死角に消えた殺人者
5. 陽気な容疑者たち
6. 炎の背景
7. 皆殺しパーティ
8. 死の内幕
9. 善人たちの夜
10. 遠きに目ありて(短)
11. 犯罪講師(短)
12. 日曜日は殺しの日
13. 完全なる離婚(短)
14. 雲の中の証人(短)
15. あたしと真夏とスパイ(短)
16. 極楽案内(短)

今、手に入りやすい天藤作品は創元推理文庫の形だけだと思う。『親友記』も買ってはあるのだが未読。

なかなか本流にはなれなかったが

天藤真の単行本の出版社を見ると大手ではなく中小のところが多い。大手出版社のノベルスなどからは声が掛からなかったのだろう。売れ筋ではなく、少数のマニア向けの作家という評価だったのかもしれない。これだけの実力者なのにとと思うのは私だけだろうか。そういう意味で、日本のミステリ史の本流にはなれなかったものの、作品自体は傑作ぞろいと言って構わない。

以前の『代表作』の号では『大誘拐』と『炎の背景』、『遠きに目ありて』の三冊を紹介した。また『鈍い球音』は『野球ミステリ』の号で取り上げた。今回は『死角に消えた殺人者』と『殺しへの招待』を取り上げてみることにした。

私の住んでいる市の図書館には天藤真の作品はほとんど置いていない。地道に古書市場を探してもらうのが良いかもしれない。作品数はそれほど多くないので、全作品を集めるのもそう難しくないかも…。

「死角に消えた殺人者」

1976年KKベストセラーズ。私の手元にあるのは1981年の角川文庫版。下の『殺しへの招待』とは違って真っ向勝負のシリアス路線の描き方だ。

物語の語り手は塩月令子。母子家庭で育ち、専門学校を出て常磐商事に英文タイピストとして入社したばかり。そんな彼女の元に母親のまつ江が自動車事故で亡くなったという連絡が入る。これまでまつ江は給食センターの栄養士をしながら令子を育ててきた。その日は連絡がないまま帰ってこなくて心配しているところだったのだ。令子が現場の銚子・屏風ヶ浦へ行くと、海岸の高さ四、五十メートルの断崖から車が墜落したのだという。車と一緒に乗っていたのはまつ江以外に三人。一人目は松戸市の家具店に勤めていた二十五歳の吉川千代子。二人目は東京地方裁判所の書記官をしていた伊東寅太郎。三人目は市川の両角学園の学園長。四人はこれまでの人生の中でまったく何の接点もなく、事故直前まで別行動をしていたようで、なぜこの車に乗り合わせるようになったのかわからない。車は盗難車だったことが判明し、現場の様子から殺人事件ではないかと考えられ、捜査が開始されることに…。しかし警察の捜査はやがて行き詰ってしまう。令子は、過去、現在の細かな点を思い出し、振り返りながら独自に調査を進めていく。そして最後に判明したのは…。

「殺しへの招待」

1973年サンポウ・ノベルス。私の手元にあるのは1980年の角川文庫版。天藤真得意のコメディタッチを含んだ描き方の作品。八月。赤坂会館四階のあじさいの間に三人の男が集まった。建設会社技師の小沼洋介とルポライターの羽島正吾、職業を言わない関山晋一。三人はまったくの初対面。でも三人の手元には怪しげな手紙が既に二回届いていたのだ。カタカナのタイプライターで書かれたもので、「ダメ亭主を殺す」という内容のものだった。タイプライターはカーボンで五枚同じものが作れるので、殺す本人を含めて五人に同じ手紙を送るのだという。五人の中の一人が殺される人物で、残りの四人も同じような境遇の人物たち。手紙の差出人「YZ」は男の妻。三十歳。結婚して五年。男の子が一人いて、名前は三文字だと書いてあった。今日、赤坂会館に来るように言われて集まったのは三人。それぞれが事情を集めようとするのだが、互いに警戒が先に立って成果がない。あきらめて解散しロビーに降りたところで、四人目の男・酒井一俊が潜んでいることを発見した。聞くと五人目の人物らしき人は、若い女性で、ポーターを訪ねた後すぐ消え失せたそう。殺される男は誰なのか…。もしかしたら自分なのか…。それぞれが疑心暗鬼に陥って下手な行動をとってしまう。ダメ男たちの今後はどう展開していくのか…。そして結末に隠されているのは…。